

## 令和5年度学位記授与式 学長式辞

愛媛大学長 仁科 弘重

最近は、3月が、温かい「春」というより、冬の寒さと夏の暑さが交互に現れ、体調管理が難しい時期となりました。正月とは違う意味での「1年の区切り」のこの月に、本学の学部卒業生、大学院修了生が一堂に会した学位記授与式を挙げていただけますこと、大変嬉しく思います。

ご卒業、ご修了、おめでとうございます。心から、お祝い申し上げます。

卒業生、修了生のご家族、関係の皆様には、別室で、この会場の様子をご覧いただいております。保護者の皆様には、お子様のご卒業、ご修了をお喜び申し上げますとともに、これまで本学に賜りましたご支援に対しまして、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

また、ご来賓として、愛媛県の濱里副知事、愛媛大学校友会の高橋会長、愛媛大学経営協議会の委員の方々にご臨席いただいております。厚く、御礼申し上げます。

この佳き日にあたり、ただいま、1760名の学部卒業生に、また、410名の大学院修了生に、それぞれの学位記を授与させていただきました。学部卒業生の多くは、実社会へと羽ばたかれることと思いますが、本学で修得した汎用的能力や専門的知識・技術を活かし、それぞれの進路において大いに力を発揮してくれることを願っています。大学院修了生は、それぞれの学術領域で、真理の解明に繋がる基礎的研究や、社会実装にも繋がる応用的研究を進められてきたと思いますが、今後は、研究者、技術者、専門家として活躍いただくことを願っています。

新型コロナウイルス感染症は、昨年5月8日から「5類感染症」となりました。その後も、感染者数のピークが2回ありましたが、感染防止に留意していれば、以前とほぼ同じ生活を送れる状態になりました。

本学では、この4年間、新型コロナウイルス感染症対応のための危機対策本部会議を延べ98回開催し、私が学生の皆さんや教職員向けに発出させていただいた学長メッセージも16回になっていました。

ここにいらっしゃる卒業生は、令和2年4月に本学に入学した直後から、授業のほとんどが遠隔授業となり、構内へも原則入構禁止になりました。同級生同士やサークルなどでの人間関係ができていないうちに、「原則、stay home」となり、勉学や自己向上のモチベーションを保つのが大変であったと思います。その後、約2年間は、コロナウイルスの変異株による「波」が来る度に、いろいろな制限をさせていただきましたので、大学・大学院生活のかなりの期間が不本意な生活となり、残念に思われていることと思います。

大変つらい体験をした方もいらっしゃると思いますので、単純に「コロナ禍での経験を活かしてください」と言いにくい状況ですが、「この4年間、人々は危機的な状況の中でどのように行動し、また、自分は苦しい状況をどのような工夫で乗り越えたか」などを思い出し、皆さんの社会的な洞察力、対応力の幅を増していただければと思います。

さて、現在、日本が直面しているもっとも本質的、かつ、深刻な問題は「少子化による人口減少」であり、「縮小社会」という言葉も頻繁に聞かれるようになりました。社会が縮んでいく中で、「豊かさをどのように維持していくのか?」「社会をどのように作り直していくのか?」が、大きな課題だと思います。人口が増える時は、都市はドーナツ状に大きくなりますが、人口が減る時は、都市は「スポンジ状になる」といわれており、インフラの維持が大変困難になります。

この「縮小社会」という問題に対して、本日は2つの視点から考えてみたいと思います。

まず、「AI（人工知能）、ロボットとの協働による生産性の向上」という視点からですが、人間が生き、活動し、社会を動かしていくためには、物資やサービス、少し抽象的に言えば「富」を、生み出す必要があります。少なくなりつつある人口で、これまでと同じ、または、それ以上の「富」を生み出すためには、これまで私ども人間が行ってきた仕事のある部分を、AIやロボットに任せることが必要です。既にAIによる文書作成も始まっており、自動車などの自動運転や介護ロボットも遠くないうちに実用化すると思います。すなわち、人間、AI、ロボットの役割分担と協働とによって、「効率的な富の生産」「生産性の向上」を実現する必要があると思います。

日本の「1人当たりの労働生産性」は、OECD（経済協力開発機構）加盟38カ国のうち28位と低く、長年わが国の問題となってきました。AI、ロボットとの協働による「労働生産性の向上」は、豊かな「縮小社会」を構築するために不可欠であると同時に、わが国にとって長年の問題を解決する好機だとも思います。

次に、「1人ひとりの知の向上」という視点からですが、昨年9月、文部科学省中央教育審議会に「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」が諮問され、現在、さまざまな議論が始まっています。愛媛大学も加盟している国立大学協会でも、国立大学の在り方について議論が始まっています。そこでは、「日本人の知の総和」という概念も提案されており、人口が減る以上、それぞれの日本人が有する知を高める必要があると考えられています。実は、「日本人は、先進国の中で、もっとも、社会に出ると学ばない。自分自身に投資しない。」ことは、広く知られています。この悪しき社会的慣習を打破し、大学卒業後や大学院修了後も、学び続け、自分の知識をアップデートし、自分自身をアップグレードすることが必要です。これらのことによって、「日本人の知の総和」を高めることができるかも知れません。

また、わが国でも、近年少しずつ増えている「ジョブ型雇用」に対応できるようにするためにも、いつも自分自身をアップグレードしておくことが必要です。

愛媛大学でも、社会人のために多くのリカレント／リスキリングプログラムを開講しており、また、大学院に新たに設置した「学環」でも多くの社会人が学んでいます。今後、年代の異なる、かつ、多様な関心、能力を持った人々が学ぶ「ダイバーシティ溢れるキャンパス」「学生が、お互いに化学反応を起こし合うキャンパス」を目指したいと考えていますので、「学び続ける人生」に皆さんも是非とも参加してください。

日本では、昭和、平成、令和と、年号が変わってきました。

まず、昭和。特に戦後の昭和20年からの40年間は、基本的に「量の拡大」をベースとした成長の時代で、ここに携わった国民の向上心と努力には敬意を表しつつ、思想的には単純な時代だったのではないかと思います。平

成は、やはり、日本が、そして日本人が自信を無くし、方向性を見出せなかった30年間であったと思います。

そして、令和。地球温暖化の深刻化は予想されていましたが、それに加えて、コロナ禍、人権や民主主義をどう考えるかという価値観の世界的分断など、「激動」とともに、令和は始まりました。ただし、情報科学、ロボット、生命科学などが大きく進展してきたという、プラスの面もあります。

令和は、昭和や平成の延長線上にはありません。むしろ、昭和や平成とは「連続しない」時代になるべきだと思います。「昨年、こうだったから、今年も、・・・」という考えは、自分自身の退化に繋がると考えてください。学び続けることによってアップデートした科学的知識を基に、自ら論理的に考え、判断し、新たな価値を生み出せるような、創造性豊かな人間に成長してください。

現在の人類、私どもの祖先、ホモサピエンスは、アフリカで生まれ、いろいろな説がありますが、5万年から7万年前にアフリカを出て、全世界に広がりました。南アメリカには1万年前に、ハワイ諸島には千年前に到達したと考えられています。無論、その途中には、現代人から考えれば「越えることが不可能としか思えない」海や極地があります。私どもは、この祖先の遺伝子を受け継いでいます。新たな価値観とそれに相応しい社会の構築に、船出する時と思います。

皆さんの多くは、いま、20歳代の前半で、これからの人生は60年以上あります。これからの人生で、転職や起業をする人も、また、人生に悩み、迷う人もいると思います。その時は、再度「学ぶ」ために、愛媛大学に来てください。「学び続ける人生」を実践する本学の卒業生、修了生を応援するため、受講料などを割引する制度を検討したいと考えています。

最後に、皆さんが、愛媛大学の卒業生、修了生としての誇りを持ち、これからの変化、変容が大きい社会の中で、豊かな創造性を発揮し、活躍されることを心から祈念し、私からの式辞といたします。

本日は、ご卒業、ご修了、おめでとうございます。